

研究プロジェクト報告

研究プロジェクト1：成果報告（2018年度～2020年度）

依田 充代（スポーツマネジメント学部／体育スポーツ科学系）

1. 研究プロジェクト名

日体大とオリンピックの関わり

②「中学校・高等学校の体育理論におけるオリンピック教育・パラリンピック教育の指導案並びに検証方法の検討」報告
担当：近藤 智靖

2. 研究プロジェクトの概要

本プロジェクトは、2018年度から2020年度にわたり、①メダリストへのインタビュー、②資料の発掘、③アーカイブ、④オリンピック教育プログラム研究：日体大スタンダードで構成され実施された。

この3年間では、高等学校の「体育理論」の授業とオリンピック教育とを関連付ける取り組みをしてきた。初年次の2018年度は、高等学校学習指導要領解説の内容を踏まえた「体育理論」の授業を構想し、プレ実験を重ねた。具体的には、大学院生を対象とした模擬授業を5回行い、さらに本学部3年生約100名を対象に模擬授業を実施した。模擬授業後において簡易な質問調査を行い、指導内容に関する意見を聴取しながら、授業の改善を図った。

3. 研究成果報告

①「メダリストへのインタビュー」報告

担当：依田 充代、齋藤 雅英、波多腰 克晃、
福井 元、松浪 登久馬、亀山 有希、
神田 俊平、富田 幸祐

このプロジェクトは、日本体育大学・日本体育大学大学院を卒業したオリンピックメダリストに対するインタビュー調査や原稿依頼、及びオリンピックメダリスト関連資料の収集から、オリンピックレガシーの構築を目的に設定されている。

2016年度から蓄積した原稿を2020年に「日本体育大学 オリンピックメダリストの軌跡」として刊行した。担当者は上記の通りである。

その後、2019年3月に第一回目の検証授業を神奈川県立大和高等学校にて実施した。この授業では、高校生にとって指導内容が多すぎることや、生徒のニーズに十分に適していないとのご指摘が参加者からあり、さらに授業案の修正を重ねた。

2年目の2019年度は、修正した授業案を基に、さらなる授業展開をした。5月に第2回目の検証授業を東京都市大学附属中学校・高等学校にて、高校1年生165名に対する体育理論を実施した。ここでの研究成果は、2019年度の日本体育学会慶応義塾大学大会において口頭発表をした。

3年目の2020年度は、まとめの時期であり、その研究の一部は、本研究所の学術誌に「高等学校の体育理論領域におけるアンチ・ドーピング教育に関する研究」として掲載した。

研究経費の支出の内訳は、実験校までの打ち合わせや撮影に関わる交通費、挨拶時の手土産、生徒の会話を録画するために机上に設置するカメラの購入等に使用をした。

③「オリンピック教育に関する研究調査-沖縄-」報告

担当：依田 充代，齋藤 雅英，波多腰 克晃

本研究は、プロジェクト「オリンピック教育」について、1964年東京オリンピックの際に沖縄でどのような活動が行われたのかを明らかにするために資料収集を行うことで、その目的は1964年東京オリンピック開催と返還前の沖縄市民の受け止め方を新聞メディアから読み取ることであった。調査場所は沖縄県立公文書館と沖縄県立図書館、琉球大学附属図書館、沖縄資料館、奥武山記念公園であった。調査の結果、多くの知見と新たな研究テーマを発見することができた。しかしながら、新型コロナウイルスの影響で現地での資料収集が困難になり、今後の見通しが立たない状況で中断している。

④「日体大学生のオリンピック・ボランティアへの参画の経緯と成果」報告

担当：齋藤 雅英，依田 充代，波多腰 克晃

ボランティア活動に参加することで、さまざまな効果が得られることをいくつかの研究が示している（UnitedHealth Group Center, 2013など）。それは、スポーツイベントにおけるボランティアでも同様であろう。スポーツ・ボランティアが注目を集めたのは、1998年の長野オリンピックで35,000人もボランティアが活躍したことが大きい。

スポーツ・ボランティアの研究動向をまとめた山下ら（2015）は、「何故スポーツ文化の成立にスポーツ・ボランティアが必要不可欠なのか」という問いに対して、「スポーツからのボランティ

アに関する研究の必要性」と「体験の意味を問う研究の必要性」を提示している。

近代オリンピックの歴史とともに歩み、日本のスポーツ文化の歴史をつくってきた本学は、選手や役員の活躍だけではなく、学生のボランティア活動でも貢献してきた。本学学生は、ボランティアを通じてオリンピックの理念を体験的に学んできたものと思われる。

実際、長野大会の報告書には、ボランティアとして参加した本学学生の名簿が記録されている。また、本学の西條修光名誉教授は学生時代に、東京大会にボランティアとして参加した体験を語っていた。

そこで、本研究では以下の調査を行う。これらの調査により日体大とオリンピックとの関係について、ボランティア活動参加の観点から調査研究を行い、とりまとめることで、次の効果が期待できる。①日体大とオリンピックとの関係について、これまでにない視点で捉えることにより、関係性の様相をより深く認識することができる。②ボランティアに参加した学生に対して、今後の活動に活かすことのできる知見を提供することができる。③今後、オリンピック・ボランティア、スポーツ・ボランティアに参加する学生に対して、事前に有益な情報を提供することができる、といった効果が期待できる。

(1) 長野オリンピック・パラリンピック調査

日体大の同窓会に協力を依頼し、長野大会の実施報告書に記載されている氏名から、連絡先を調査する。その後、対象者に連絡をとり同意が得られた方に対して、インタビュー調査を実施する。2020年度は増田大樹氏に対しインタビュー調査を実施した。インタビューの文字おこしまで終了しており、当時の貴重な資料もお貸しいただけることとなっている。しかしながら、交流が制限されているため、コロナ禍の終息をまって調査を継続していく。

(2) 1964 東京オリンピック調査

1964大会当時、学生としてボランティアに参加した、西條修光名誉教授、上野純子名誉教授へのインタビューを実施した。また、1964大会で学生がボランティアとして参画することになった経緯を読み解くために、当時の資料等を収集した。上野名誉教授からはボランティアスタッフに配布された「入場券目録」をご提供いただいた。西條名誉教授と上野名誉教授のインタビュー文字起こしまで終了している。今後は、追加でご提供いただいた資料の分析と、追加のインタビュー調査を実施し、結果をまとめる予定である。

4. 主な発表論文等

日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所

編『日本体育大学 オリンピックメダリストの軌跡』日本体育大学、2020年。

小野田 倫大, 伊藤 雅広, 滝沢 洋平, 松本 健太, 近藤 智靖「高等学校の体育理論領域におけるアンチ・ドーピング教育に関する研究」『オリンピックスポーツ文化研究』第5号, 2020年, pp. 149-165.

5. 研究組織（プロジェクトメンバー一覧）

研究代表者：依田 充代

研究者：石井 隆憲, 後藤 彰, 近藤 智靖, 齋藤 雅英, 波多腰 克晃, 松浪 登久馬, 亀山 有希, 福井 元, 神田 俊平 (2020年3月まで), 富田 幸祐
(受理日：2021年3月31日)